

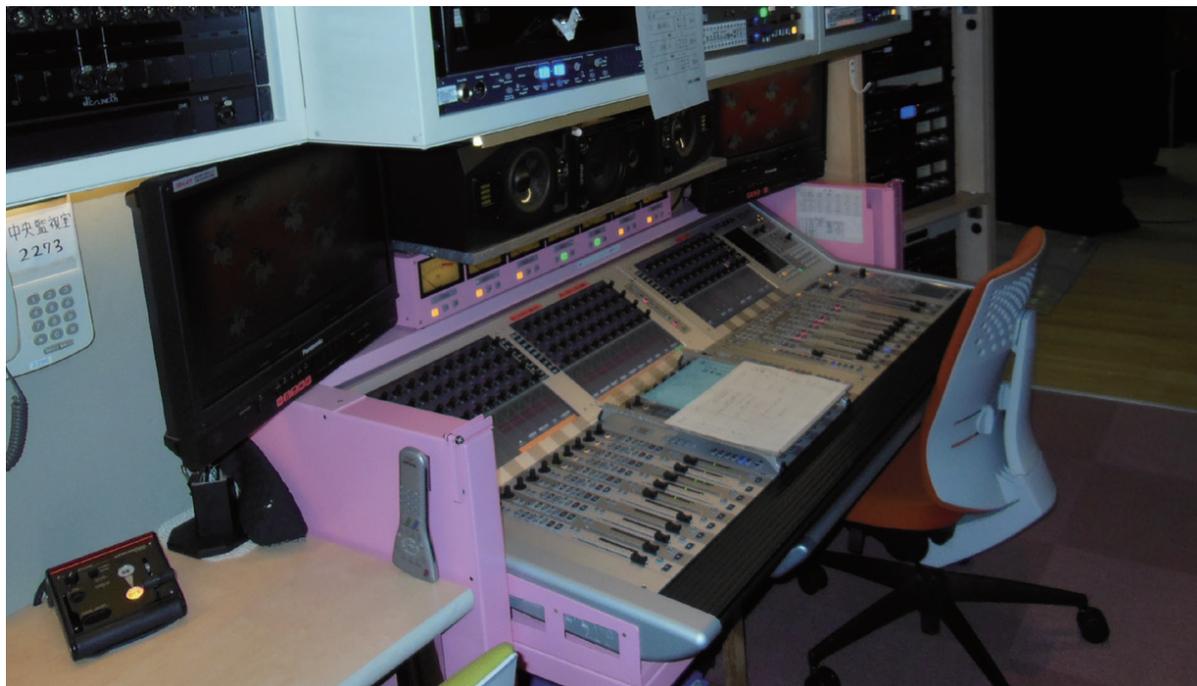
## VISTA 1 ユーザーレポート

独立行政法人日本芸術文化振興会 様

Vista 1-32F



小ホール調整卓をVista 1-32Fで更新



### 独立行政法人日本芸術文化振興会 国立文楽劇場 舞台技術課

国立劇場は「わが国古来の伝統的な芸能の公開、伝承者の養成、調査研究などを行い、その保存及び振興を図る。」ことを目的としています。

その中の国立文楽劇場は、国立劇場、国立能楽堂、国立演芸場について、昭和59年に東京以外で初めて開場した国立の劇場です。文楽劇場と呼んでいる753席の劇場と159席の小ホールからなっており、今回は小ホールの音響調整卓回りの設備整備で、調整卓としては、今回で3代目になります。以前の調整卓は平成15年に設置されたもので11年が経過していたため各所が老朽化しているとともに、公演の多様化に伴い入出力数が絶対的に足りない等の問題を抱えていました。

そんな中で設備の整備が決まりましたが、



小ホールには問題がありました。調整卓の設置場所が舞台袖の通路の途中ということで調整卓や周辺機器の設置場所が非常に狭いということです。特に調整卓の奥行きは80cmが限界の数値でした。そこでそのサイズに適合する調整卓を片っ端から全て借りて小ホールでの使用に耐えるモノかどうかを、オペレートしてもらっているPACウエストの皆様と検証していきました。その結果スチューダー社のVISTA 1に決定しました。更に通路の動線確保のため搬入時には調整卓を跳ね上げられるようにしてあります。

選定理由としては、とにかく使いやすいことが1番の理由としてありました。必要十分な仕様はクリアしていますし、使い方の自由度が高いのは特筆すべきだと思います。操作性は非常に良く、各機能を使用するのに、他の調整卓のようにフェーダー部分から目を離したり、遠い操作面へ手を伸ばしたりすることなく操作できるVistonicsは非常に優れたインターフェイスだと感じました。また、レイヤーが多く切り替えられるのは、多様な使い方をする劇場、ホールにとっては非常に有難いことです。

今回導入した仕様は、入力は本体の32chに加え、外部I/OのD21mを使用してアナログ40chデジタル8chを追加し、出力は本体の

32chに加え、外部でアナログ24chデジタル8chを追加しています。少し多くなっているのは公演ごとのパッチによる仕込を止めて、それによるトラブルを一掃するという目的のためです。このことによりオペレーターの負担はかなり減り、より公演の内容に集中できるようになりました。劇場、ホールなどではどうしても出力系統が多くなりますが、この点においてもVISTA 1とD21mの組合せは、構成に柔軟性を持てるので設計が容易でした。

工事期間は設置するための通路を拡張、といっても15cm程ですが、そのために全体で一か月程度を要しましたが、調整卓が入ってからは一週間程です。オペレーターのトレーニングに5日間を予定していましたが、実際には2日間程度でトレーニングは終わってしまい、残りは実際の各種公演の仕込にあてられました。

更新後のオペレーター達の評判も良く、音質の向上もよく分かり非常に満足度の高い更新になりました。昨今は更なる使い勝手の向上を目指しインプット、バス構成の変更を考えています。

スチューダーサウンドで創られた日本の伝統芸能の音を、一人でも多くのお客様に聴いて頂けますよう、皆様のご来場を心よりお待ちしております。